

天木志保美 著

『ケアと社交—家族とジェンダーの社会学』

ハーベスト社 (2007年)

片岡 佳美

KATAOKA Yoshimi

主婦は、家庭内にいつも一人だけ取り残されて家事労働に専念し、外部社会からすっかり孤立している——これまで主婦はそのように捉えられることが多かった。しかし、こうした見方は、家族と社会を媒介するものとして職業労働しか念頭に置いていないために生じるのではないか。そしてそのような見方をするかぎり、今日の急激な社会変化がもたらす家族や職業、そして地域に対する不安は克服されないのではないか。本書は、こうした問題意識に基づき主婦を再考する視点を呈示しようとする。すなわちそれは、主婦を、育児、看護、そして介護に日々エネルギーを注ぎながら家族外部の社会とつながっていく「ケアラー」として捉えなおす視点である。

本書の議論は以下のように展開される。まず、序章では問題提起として、1980年代の女性の職場進出について再検討される。フェミニズム運動も盛んだった当時の世論はこうした動きに対して肯定的で、キャリアウーマン、シングル・ライフ、シングル・マザー、DINKS (Double Income No Kids)、夫婦別姓など、新しい女性のライフスタイルが華々しく迎えられ、専業主婦はむしろ肩身が狭いほどであった。しかし、実際はキャリアウーマンのような女性は一握りで、女性の職場進出というのは家庭を持つ主婦たちのパート勤務の増加を指すというほうが適切であった。一方、この時期、ショートステイ、デイサービス、ホーム

ヘルパーといった在宅福祉サービスと介護専門職の充実に向けた社会的な取り組みも始まり、これまで主婦に全面的に依存してきた介護や看護などが家庭外で展開されるようになった。だが、そのマンパワーとしてはやはり主婦層が頼りにされ、しかも非正規雇用が中心であった。結局、それから20年ほど経った今表れているのは、相変わらず女性は貧困であるという事実である。冒頭でこうした現実をあらためて示されると、女性は社会の周辺部に追いやられたままだとか、女性の職場進出とはやはり女性の社会進出ではなかったとか、思わず溜息をついてしまう。しかし著者は、そのような反応で終わらず、主婦と社会の関係について問いなおす方向にわれわれを導いていく。

第1章では、産業化と家族の関係についてタルコット・パーソンズが提唱した説が取り上げられる。よく知られているようにパーソンズは1950年代に、産業化が進むアメリカ社会に適合的な家族のあり方は高度に専門分化した核家族、すなわち完全に孤立した核家族であると論じた。核家族においては、パーソナリティのための機能遂行(子どもの社会化、成人のパーソナリティの安定化)がもっぱら課題となり、表出的リーダーとしての妻がそれを専門的に担うことになる。パーソンズは、こうした核家族が全体社会、すなわち産業社会から構造的に孤立しているために、家族と社会が葛藤することなくそれぞれの機能を遂行す

ることができると考えた。ここで本書の著者は、そのことが暗に主婦の孤立を意味することに注意を促す。そして、表出的リーダーとしての主婦は、家事労働の担い手としての主婦よりも他者との関わりを持つように思えるのに、パーソンズのように社会を職業体系（または経済システム）という点からしか捉えない産業主義的な立場をとるかぎり、家族や主婦が社会から孤立しているという見方が成り立ってしまうと批判する。

第2章から第4章では、パーソンズと同時期に彼とは異なった視点からアメリカ社会の家族を論じたユージン・リトウォークの研究が取り上げられ、核家族が主婦を介してさまざまな第一次集団と関わり合っていることが示唆される。

リトウォークと言えば、日本の家族社会学者の間では「修正された拡大家族」という概念で有名である。それは、産業化した社会の核家族にとって、別世帯の親やきょうだいのような第一次親族は家族生活を維持していくうえで重要な存在であり、深いつながりが認められるということに注目した概念である。リトウォークは、修正された拡大家族という家族のあり方こそ産業社会の維持・存続にとって有効であると論じ、パーソンズの「孤立した核家族」説に対抗した。

本書ではこのほかのリトウォークの研究、すなわちかれがもっとも力を入れて取り組んだという第一次集団についての研究が紹介される。リトウォークによれば、家族を除く、親族、近隣、友人といった第一次集団は、産業化に伴ってその特質をいくらか失ったが、核家族の脆弱性を補完するうえでそれぞれ独自の機能を有している。つまり、親の介護にせよ子どもの教育にせよ、高度に産業化した社会では官僚組織が専門的なサービスを提供する。しかし、それらのサービスはどうしてもフォーマルなものに限られ、不規則で個別的なサービスは家族において賄うほかない。核家族にはそ

の担い手が妻や母（つまり主婦）だけしかおらず、その脆弱な核家族を支えるために親族、近隣、友人がそれぞれ重要とされる。こうしてリトウォークは、核家族が官僚組織とも第一次集団ともつながっていると論じる。

リトウォークのこうした主張をふまえ、本書の著者は、家族と外部社会を結びつけているのは主婦によるケアの活動であると考え、「ケアラー」としての主婦という視点を呈示する。それは、従来の「家事労働の担い手」や「表出的リーダー」といった捉え方が見落としてきた、社会とつながりを持つ主婦を描き出す視点である。

続く第5章から第7章では、イギリスの社会学者グラハム・アランの社交に関する研究が取り上げられる。そこでもやはり著者は、社会とつながる主婦を見いだそうとする。

アランによれば、現代社会では、家庭とその内部に生ずるさまざまな活動が人びとの主要な関心事となる「家庭中心性」が見られ、そしてそれは人びとの意識にも影響し、家庭生活それ自体が生きがいとして捉えられるなど「家庭中心化の志向性」が見られるという。しかし本書の著者は、アランが、こうしたライフスタイルの浸透にもかかわらず人びとの家庭外の社会的絆が衰退するとは述べていないことを強調する。

確かに、家庭中心化の志向性はプライバシーを重視するため、家庭内に他者を入れにくくすると考えられる。しかし、アランによれば、それは必然ではないという。たとえば、近隣の人は排除されるが親しい友人なら家庭に招かれたりする。アランは、ジェンダーや階級の違いによってさまざまに異なった社交関係が展開していることを具体的に示す。これを受けて本書の著者は、「人間関係のエキスパート」に鍛え上げられたケアラーとして主婦もまた、家族の境界を超えた人とのつながりをユニークに形成していく可能性がある

示唆する。

このように、本書を通して著者は、主婦が社会から孤立しているという見解に反論する。リトウォクもアランも直接的にはそのような立場から議論を展開したのではなかったが、著者の主張を強力に支持するものとなっている。その理由は、著者が丁寧かつ慎重にこれらの研究を読み解いていることにあるのは言うまでもないが、それらの社会学者が、産業主義的な価値から自由な立場で社会や家族、そしてジェンダーを論じるのに成功していたからとも言えよう。その点で、著者がかれらの研究（日本の家族社会学者の間では、あまり知られていない）に着眼した点は高く評価される。

著者が提唱するケアラーとしての主婦という視点は大変興味深い。産業主義が行き詰まりを見せ

始めている現代社会において、新しい女性・男性のあり方（女性の男性化による「男女平等」を超えるものとして）、家族のあり方（「個人化する家族」の次のものとして）、働き方（成果主義に煽られすぎないものとして）、そして生活の仕方そのものを考えていくことは重要かつ緊急の課題である。そうした問題を議論するさいに、この視点がどのように生きてくるのかがとても気になる。本書では、終わりの数ページで、コミュニティの統合という点から少しそのあたりのことについて問題提起されているようにも見受けられるが、詳細な分析を通してこの概念の有効性を示すことが残された課題と言えよう。

評者は、著者の今後の研究に大きな関心を持っているし、また、自分自身もそのような研究に微力ながら貢献したいと考えている。